

学生一人ひとりの「強み」を見極めながら、学生が自発的かつ積極的に学んでいきたくなる授業を展開する

2018年度秋学期ティーチングアワード受賞
対象科目：Communication Strategies2

日常会話やディスカッションなどをするためのオーラルコミュニケーションのスキルを学ぶ、「Communication Strategies2」。理工系3学部の1年生の必修科目で、担当教員はいずれも同じシラバスに沿って教える。

早稲田大学非常勤講師の山内先生もその一人だが、自身の専門分野である「多重知能（MI）を活用した英語教育」を取り入れている点に特徴がある。授業アンケートで学生からも高い評価を得た、授業での取り組みについて聞いた。



山内ダーリーン

早稲田大学非常勤講師

「多重知能（MI）調査」をもとに、学生の個性に合った授業を行う

山内先生の授業では、学生一人ひとりの個性に合わせたアクティブ・ラーニングに重点を置いている。では、そもそも学生の個性をどのように把握するのだろうか。活用しているのは、「多重知能（MI＝マルチプル・インテリジェンス）調査だ。

「知能指数（IQ）はご存じの方が多いと思います。ただ、人の能力はIQだけでは測れません。身体的な能力が高い学生もいれば、写真や絵を見るのが好きな学生もいます。MIの調査を行うことで、そうした多彩な能力を知ることができます」。

具体的には、授業の第2回目に「MI Inventory」というシートを学生に配りMIを調査する。シートには「方向感覚はいい」「楽器を演奏する」「暗算が得意」といった質問項目が日本語で書かれていて、それについて「まったくあてはまらない」から「ぴったりあてはまる」までの6つのうち一つを選択する。この調査結果によって、言語的知性や論理数学的知能、身体・運動感覚の知性、対人力といった能力のうち、自分がどこに強みを持っているのかを把握できるという。

調査の結果を見ながら、山内先生はそれぞれの学生の強みを意識した教育法を実践していく。「たとえば、身体能力が優れている学生なら体を動かすような勉強法がいいし、コミュニケーションが得意な

学生にはグループワークで能力を発揮できます」。実際の授業では、グループでマインドマップを作成したり、英単語が書かれたカードを使ってトランプの「神経衰弱」のようなことも行う。

「マインドマップでは絵を描くし、『神経衰弱』なら身体を使います。私が役割分担を決めるわけではなく、グループの中でそれぞれの強みが自然に発揮できるような授業を心がけています」。

学生自身が自分の強みと弱点を意識することで、能力が伸びる

MI調査でわかった個々の学生の強みや弱点は、学生にもきちんと伝える。「MI Inventoryの結果を見て、どこが強いかが弱いのかを学生が自分で意識することが重要だからです。また、弱点があったらダメということではなく、学生には自分の得意なところを使って弱点を強化していけばいいと伝えていきます」。実際、15回の授業が進んでいく中で、学生たちの能力はどんどん変化していくという。

学生が授業に能動的に参加し、自分自身を管理するために役立っているツールの一つが、表面に学生の氏名と顔写真、裏面には出席状況をはじめ各学生

の授業でのさまざまなデータを記載したハガキサイズのカードだ。授業では毎回このカードを配り、学生はカードの裏面を見ることで現状を把握し、授業で何をどう学んでいくべきかを自分自身でコントロールできるという。

「学生が困っていればもちろんアドバイスしますが、基本的にはそれぞれが責任感を持って勉強をしていくことが望ましいと考えています。私はどちらかという『教える』というよりは『ファシリテーター（進行役）』のような立場でいたいですね」。

ちなみに、このカードは毎回の授業の最初に山内先生がシャッフルして机の上に配り、カードが置かれたところがその日の自分の席になる。

「いつも同じ席で学ぶより、新鮮味があって学習が捗ります。また席順が変わると、隣の人や前後の人も変わります。話しやすい相手やそうでない相手、自分とは違う能力に強みを持つ人など、さまざまな人と一緒に学ぶことは、学生にとってよい勉強になります。社会に出て仕事に就いたときには、隣の人を選べないので、その練習にもなると考えています」。

この科目は、オーラルコミュニケーションのスキル向上が目的であり、山内先生は、授業の中で学生たちがコミュニケーションを取る機会をできるだけ増やすようにしている。そのため、グループに分かれてディスカッションをする回や、テーマを決めてグループごとにグラフやチャートを作成する回などでは、設定するテーマを工夫しているという。

学生が興味を持つテーマを選ぶことで、積極的な発言を促す

「たとえば、『ラーメンは塩・味噌・醤油のどれがいいか』というテーマで議論をさせたり、『みんなのペンケースの重さ比べ』でグラフを作らせたりしています。学生に身近なテーマにすることで、みんなが積極的に発言して議論が活発化します」。

また、学生にとって特によい経験になるというのが、2人一組で行うスピーキングテストだという。

「この授業は2回あり、最初は2人でお互いに英語でインタビューをしますが、2回目はキャンパスなど教室の外に出て、外国人を探してインタビューをお願いします。時間は10分程度ですが、学生は恥ずかしいし緊張もします。その分、うまくできれば達成感が味わえま

す」。先生は、学生が録画したインタビューの様子を見て内容などをチェックする。「学生が主体になって行うことにも意味があるし、教室の外でインタビューをすることで英語をツールとして意識してもらえる意義もあります」。

こうした工夫の結果、2018年度末の学生アンケートでは、この授業を「よく理解できた」「有意義だった」という項目で高得点を獲得した。期末試験の成績も、ほぼ期待していたレベルに達していたという。今回の受賞については、「演習を通して学問の使い方を理解できたことで、学問に対する興味が増したという点が大きいのではないのでしょうか。受け身の授業から主体的な学びへと学生の姿勢が変わったことが評価されたのかなと思います」。

今後も、学生が興味を持って取り組めるテーマを見つけていきたいという山内先生。

「この科目は90分×15回しかありませんが、本当はもっと長い時間——たとえばその3倍くらいは学生たちにさまざまな形でオーラルコミュニケーションを取ってほしい。それには、学生たちのやる気を後押しするようなテーマ、内容の授業を提供し続けることが必要だと考えています」。

また、テクノロジーを使いこなすのが得意な理工系学生ならではの特性を生かして、Course N@viをはじめとITツールをこれまで以上に授業に取り入れていくことも検討している。

